

海外アカデミック・ディスカッション	
作家の思想形成過程をめぐる考察に関する現地研究者との対話	
洲崎 圭子	比較社会文化学専攻
期間	2009年10月9日～2009年11月14日
場所	メキシコ・シティ（メキシコ合衆国）
施設	メキシコ大学院大学およびメキシコ国立自治大学

### 内容報告

筆者が研究対象とする作家ロサリオ・カステリャノスは、米国などにおいても多くの博士論文で取り扱われているものの、それらの論点はイスマノアメリカ圏を出ることはなく、あくまでもラテンアメリカ域内、あるいはメキシコ国内において比較検討され、議論されている。階級、人種、ジェンダーなどの視点をクロスさせたカステリャノスの第一小説が、欧米で第二波フェミニズムが出現する以前に第三世界と呼ばれたメキシコで出版されていた<sup>1</sup>ということとを考慮すると、作家の思想には、イスマノアメリカ圏特有のフェミニズムが内在すると仮説を立てている。筆者の博士論文では、その思想形成過程を分析することとしており、ポストコロニアル的視点からフェミニズム批評の西欧中心主義的限界を照射し、フェミニズムの新たな可能性を探求しようと企図している。論文執筆のためには、現地メキシコにおける研究動向調査は不可欠である。

筆者は今般、メキシコ大学院大学アジアアフリカ研究センターで開講されている日本学講座に参加する機会を得た。同講座は、修士／博士課程の学生のために8月から開講中の講座で、筆者が参加したのは、律令制と平安時代のフェミニズム文学を扱った二つのゼミである。出席者はすべて日本・日本文化に関する研究を志している者であり、美術、歴史、文学など、各分野にまたがって関心を持つ学生たちであった。毎回数本の文献を読むことが課題として要求され、講義の内容やその結果は、筆者の日本文化・知識の根底を覆すものであった。主に二点に絞られる。まず、日本における律令政治に基づく荘園制度社会は、メキシコの植民地期において長らく保持された大土地所有制度の状況と類似したものであるという点である。さらには、日本の古代神話におけるシャーマンの存在と、メキシコ先住民に伝わる神話における女神像との類似性である。為政者側に都合よく創られた「神話」すなわち母性神話が創出された仕組みを検討する際、非西洋である日本にお

ける同様のシステムとの比較分析は、大いに示唆を得るところでもあると考える。

講座参加のほか、学内で催される各種イベントにも参加した。訪墨中の Rita De Maeseneer 教授（アントワープ大学）によるドミニカ文学についてのコロキオが催され、日本にあっては不可能な、最新のドミニカ文学事情について情報を得る好運に恵まれた。また、メキシコ・シティの現市長である Marcelo Ebrard Casaubón 氏の講演会に参加する機会もあった。40歳代で現職に就いた同氏と議論を戦わせるべく学内外から大勢の聴衆がつかけていた。こうした授業外のイベント参加の機会に恵まれたことにより、ラテンアメリカ世界に対する理解がより深まり、今回の海外研修は一層実り多いものとなった。

今回は、メキシコ大学院大学文学言語学研究中心の客員研究員としての身分が付与されたこともあり、メキシコ文学界の重鎮である Yvette Jiménez De Báez 教授との個人的なディスカッションをはじめ、同教授の紹介で多くの教授陣と意見交換を交わすことができた。De Báez 教授からは、筆者の研究対象とする作家についての貴重な参考文献一覧を提示していただいたほか、イスマノアメリカ文学の方向性および研究方法などについても的確なアドバイスを得たところである。また、同センター所長の Luz Elena Gutiérrez de Velasco 教授からは、メキシコにおけるフェミニズム文学批評の立ち位置をはじめ、ラテンアメリカの女性作家へのアプローチ方法などについても新たな示唆を得たところである。そのほか、中国文学を専門とする客員教授や、メキシコ国立自治大学で文学批評講座を主宰する教授とも議論をする機会があり、文学研究全般について、筆者の見識を深めることができたのも幸いであった。今後、ラテンアメリカ圏域の文学作品にアプローチする際、日本人としての独自の視点を持つことの重要性について認識を新たにしたところである。

なお、今回の滞在中に得られた新たな考察結果を一部反映させて早速に、11月29日に立教大学で開催さ

れた第6回ジェンダー史学会大会（部会A）において「メキシコの小説にみる構築された「女」の役割とは—soltera（独身女性）の描かれ方を通して—」と題して口頭発表を行った。また、2010年1月30日には、上智大学グローバル・スタディーズ研究科大学院生・次世代研究者ワークショップ「第8回メキシコにおける女性の表象：1940年代～60年代の文学・映画を中心に」において、「ロサリオ・カステリャノスの小説にみる「女性」造形の方法」という題目で発表を予定しており、今回の研修で得た成果の一部を反映させたいと考えている。

これらの考察に加えて今後は、最近新たに出版された作品やエッセイなども参照しつつ検討を行い、博士論文のなかでさらに論考を積み重ねる所存である。

**注**

1. 洲崎圭子「「第三世界」発のフェミニズム — 『パルン・カナン』を巡って —」、F-GENS ジャーナル No.10、お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラムジェンダー研究のフロンティア、2008、pp.243-248 を参照。

すさき けいこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

**【指導教員のコメント】**

洲崎圭子さんが、博士論文の対象としている作家ロサリオ・カステリャノスに関しておこなった海外アカデミック・ディスカッションの成果は以下の3点に要約できる。第一は、メキシコ大学院大学文学言語学研究センターの客員研究員として、メキシコ文学に関する up-to-date な討論・情報入手・学術交流がおこなえたこと、第二に、メキシコ文学を研究する日本人研究者として、自己の研究者アイデンティティを確立する研究対話が現地の日本研究をつうじておこなえたこと、第三に変動する文化・社会動向をメキシコ大学院大学のキャンパスのなかから体得できたことである。これらの成果は、早々と二つの研究集会での発表によって結実しつつあるが、さらに博士論文のなかで展開されることを期待している。

（お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 竹村 和子）